

令和6年度 第63回米子市美術展覧会（市展）
部門別審査講評 及び 市展賞作品講評

【洋画】

審査講評：

今回は出品数も少なく、レベル的にもあまり高いとは言えず、奨励賞を選ぶのに多少苦労したが、市展賞は木村広美・玉井詞共作「黄金のガンダーラ」と環境汚染を訴える太田雅「還帰するモノ」の2点に決定した。平岡遵子の「ルーマニア」は惜しくも市展賞を逃したが、風格の漂う作風。宗内彰志「放課後」は小品ながら技術的に群を抜いている。木村美月の「ガーベラ」は将来性に期待する。

（評者：倉鋪 悠）

市展賞：木村 広美・玉井 詞《黄金のガンダーラ》

毎年安定した作風と圧倒的な完成度の作品を出品されていることに感心する。細部の緻密な表現はさすがである。一度具象作品を見てみたい気がする。

（評者：倉鋪 悠）

市展賞：太田 雅《還帰するモノ》

環境汚染を訴える意表を突いた作品。人間がもたらした環境汚染の被害を被る自然界の動物たちの悲鳴が聞こえてくるようである。

（評者：倉鋪 悠）

【日本画】

審査講評：

出品数は近年少なくなってきたが、個性的で工夫ある作品が多くみられ、見栄えのある展覧会である。

（評者：審査員一同）

市展賞：春原 敦子《わたし》

表情は活々として、立体感があり、バックの筆使いに工夫があり、服の質感がうまく表現されている作品である。

（評者：審査員一同）

【書道】

審査講評：

これまで出品数が増であったのに今年度は7点減になった事は少々寂しかった。しかし、出品された作品は個性豊かで（師風を追わない作品で）良かったと思う。ただ、調和体と篆刻の作品が少なかったのは残念であった。

（評者：山田 龍香）

市展賞：伊藤 晃希《贈野口小蘋》

文字の大小、潤濁を自在に書きこなした作品である。豊かな墨量により作品全体から重厚さを感じられる。

（評者：藤山 雅鳳）

市展賞：松本 春生《なべて世の》

多くの和歌をおおらかにそして紙色と相まって静かにおさめた作品。平素の学びが実を結びました。

（評者：吉岡 芝香）

市展賞：木村 碧秀《王昌齡詩》

行間もスッキリと実に動きのある洗練された上品な作品に仕上がりました。1文字1文字の字の形がとてもよいです。

（評者：原田 紫柳）

【写真】

審査講評：

出品作品全体がとても各ジャンル富んでいたのが良かった。単写真、組写真、風景、風俗、モノクロなどで構成され、各人の個性が豊かに表現された。

上位作品には作者からのメッセージが伝わるものが多く選ばれている。自然で素直な表現が見る者に伝わったと思う。

（評者：審査員一同）

市展賞：中本 珠子《晩夏》

全体の構成が安定してバランスがよい。主張しすぎず夏の終わりのものさびしさや空気感が感じられる。中央の猫の存在は小さいながらも作品にインパクトを与え印象的である。

（評者：審査員一同）

市展賞：吉田 源市《一瞬の華もよう》

一瞬の大きな迫力ある波しぶきの形を見事なシャッターチャンスでとらえている。海が荒れているようでもないのに、アート作品かのような波の姿に惹きつけられる。ピントもしっかりしている。

(評者：審査員一同)

【工芸】

審査講評：

魚の出展が多かったが囲りのラフな仕上げで品位を下げたものが目についた。鱸（すずき）は秀一な出来栄えでした。切り絵は背景も含めて懐かしさを感じた。新たな材料を使ったの作品も出展されていて先が楽しみです。

(評者：倉益 正和)

市展賞：入口 慶《鱸》

木彫の鱸（すずき）の姿は彫り込まれていて、いきなり包丁を入れたくなる様な元気の良い力強い作品であり、感銘を受けました。

(評者：安藤 釉三)

市展賞：高塚 俊蔵《歴史ある博愛病院》

記憶にある人も今は少なくなったモチーフだが、ともすれば単調になりがちな建物の特徴をリズムカルなデザインとしてうまく表現している。樹木を彩色したものとシルエットのものと使い分けて作品に奥行も良く出ている。

(評者：大谷 治)

【彫刻】

審査講評：

昨年よりも出品点数が増え、作品の素材も木、陶、ガラス、石と多岐にわたり、とても賑やかな展示となった。木彫作品の出品が多く、刃物を使った彫りの技術はどの作品もすぐれたものを感じる。ただ、なぜ彫刻部門に出品したのか明確な意図が伝わってこない作品が見られ、そのあたり改善を来年は期待したい。

(評者：永江 靖幸)

市展賞：野坂 文枝《glass silhouette》

板ガラスを積み上げて、人物の横顔を表現した作品である。ガラスの持つ硬質な感じを思わせないやわらかな曲線と積まれたガラスの側面の輝きは、太陽の光をうけて煌く海辺にたたずむ女性の横顔のように感じた。

(評者：永江 靖幸)

【デザイン】

審査講評：

今年度はデザイン部門が始まって2回目の年になるが、昨年度の2倍以上の出品があり、市民の部門に対する関心の高まりを感じる。イラストの作品が多く、現代の生活に根付いた表現の多様性が感じられたためか、自身の世界観を表現したものが目立った。その中でも物事をどのように捉え解釈し、表現として落とし込んでいるのか、明確に伝わってきたものを選んだ。

(評者：清永 桃花、岡田 政幸)

市展賞：中原 悠月 《お星様になったおじいちゃんで行きたかったオーストラリア》

キャンバスにペンの素材、用具選び、画面の構成、明暗、モチーフの融合からは、複雑さの中に心地よさを感じることができた。モチーフに託した視点、視座が興味深く、社会が抱える課題の発見に必要な要素を垣間見ることができた。

(評者：清永 桃花、岡田 政幸)